

芥川だより

発行日 * 2021年1月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
印刷・発行 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



ホンマかいな！知らなかった。MMT

「経済学者にダマされたらあかんで、言うだけの無責任な人間なんやから」とある経済学者が言ったと聞いた記憶がある。私も少しは勉強をしたはずなのに全く覚えていないし関心も消えていた。ところが、経済学とは無縁だった友人から MMT について話を聞き「こらいかん、わしも勉強せな」と思い、にわか勉強を始めた。

MMT とは現代貨幣理論の略で、これまでの定説を覆す魔法のような考え方である。完全雇用の達成・格差の是正・適正なインフレ率の維持など経済の均衡が今の資本主義体制でも出来るという画期的な理論でアメリカの経済学者が提唱したのである。

これまで日本の政府は財政赤字が続けば財政破綻を招きギリシャのようになるから、財政の均衡・プライマリーバランスを是が非でも守らなあかと消費税増税を無理やり強行し、支出を減らす為に社会保障費や地方交付税等を減らし続けてきた。金融緩和といいながら増税をシアクセルとブレーキを同時に踏んできた結果、20年もデフレが続き国力は衰退し格差が大きくなり不安定な派遣・契約社員が増え消費者心理は冷え切っている。そしてコロナの感染でどうしようもないほど人々の自信が無くなっている。

MMT 理論によれば、変動相場制で自国通貨を発行している政府は、(国民ではなく、政府の)債務がどれだけ増加しても、通貨発行で債務の償還が可能なので債務不履行(デフォルト)にはならない。国の財政赤字や財政均衡などは気にしなくてもいい。どんどん支出を増やして社会の隅々まで行きわたるようにして有休生産設備や失業者をなくし、全ての生産資源を活用する。格差をなくし完全雇用を守り適正なインフレ率を維持する。ただ注意する点の一つ、インフレ率であって赤字国債残高ではない。皮肉にも政府の財政が赤字になるほど民間経済は黒字になる。逆に政府の財政が黒字になれば、民間経済は赤字になる。貨幣は担保なしで創造されるものだから、政府が発行しようと思えばいくらでもすぐに発行できる。これまで私たちは、政府と財務省にダマされ続けてきたと覚えてならない。

死をめぐるあれやこれ(74)

ノンシャラン

石川 吾郎

生在陽間有散場 なんでもおしまいはあるもの
死帰地府也何妨 あの世界にいくのも世のさだめ
陽間地府俱相似 いきるも死ぬも相似形
只当漂流在異郷 ただよそ者としてただようばかり

これは、中国・明の時代に蘇州で活躍した書画家・文人、唐寅(とういん)の辞世の作。彼は生涯官途には就かず(就けず)在野で活躍をした。時は比較的平穏な世界で、経済的文化的に繁栄をしていた蘇州を舞台に活躍した。在野の「市隠」として人生をエンジョイし、優れた書画作品を残した。盟友の文徵明ともに昨年、生誕五百五十年であったという。これはその唐寅の辞世の詩なのだ。

肩の力の抜けたノンシャランな雰囲気はうらやましいかぎり。これを目標にしたいと思います。

付記・ノンシャラン(nonchalant)というフランス語にはのんき、風来坊、無頓着、怠惰などの意味があるが、冷静な批判力も含意されるといいます。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 74	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 82	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 32	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 38	下村嘉明	5
大人の今昔物語 75	石川吾郎	5
新型コロナウィルス愚考(9) 明石幸次郎	明石幸次郎	6
オクラの山たより 52	因了生	7
隠された歴史 27	満田正賢	10
道をゆく 21	成瀬和之	13
編集後記	S K 生	14
ふみの道草 32	山椒魚	15
俳句	土田裕 影山武司	15

素老人☆よもだ帳 (82)

坂本一光

◆学校は楽しいか

学校は楽しかったか。時に振り返ってその問うことがある。しかし振り返ってみても、小学校から高校までを思い出して、「あ

の底抜けに楽しかったとき」がとんと浮かばない。大学から大学院の頃は、希望と不安、夢と挫折を繰り返しながら、楽しくもあり、楽しくなくても何かに意味を見つけていることに意義を感じることができた。

底抜けに面白かったのは、大学に職を得てから四十歳過ぎまでの五、六年。若くもないがようやく「社会人」となり、ビッグバン後の（見たことはないが）「宇宙の晴れ上がり」の中にいるような、意気軒昂たる気分であった。一九八〇年代後半からバブルが弾ける頃までの数年間は、来る日も来る日も、学生と一緒に、あるいは一人で、徹夜の実験をしても苦にならなかった。

しかし、やがて大学は法人化された（二〇〇四年）。そして、昨年の学術会議会員任命拒否問題が象徴したように、戦後一貫していた政府による大学支配の完成に向けた欲望と干渉は、すでに地方の大学にもひたひた押し寄せてはいた。しかし、教員はまだ自由であった。少なくとも私の所属する学部の研究室には、「若い者は今のうちにやれること（実験研究のこと）をやっておけ」という雰囲気があった。もともとこれは、「管理運営などは俺たち上の世代に任せておけばいい」と将来を期待する若手への激励の善意から出たことではなく、「新米の駆け出しが口を出すなど十年早い」というものであったけれども、ありがたいことであった。

しかし、法人化に向けた大学の動きの中では、そんな雰囲気もあつと言う間に霧散

してしまい、私の「宇宙の晴れ上がり」も幕を閉じた。修士課程や博士課程を修了したばかりの若い教員が、採用と同時に大学の運営に組み込まれていったのもその頃からである。もちろん彼らは大変有能で、

初めて携わる大学運営の実務を良くこなした。私はただ、そんなエネルギーをすべて教育と研究に注ぐことができる仕組みが大学になぜないのか、無念に思うしかなかった。この先、大学はどうなるのかと。

私は、大学教員二十六年の半分を管理運営に責任ある立場で過ごしたが、そこから私を決定する何かを学び取る能力に欠けていた。その立場の私を支えていたのは、私にとって「宇宙の晴れ上がり」に相当するあの数年の経験であった。その間、何ほどの成果があったわけではないが専門に没頭した。しかしそれだけではなく、広く興味や関心を持ったことについてさまざまの本を読んだ、いや少なくとも買った。多少、物事を思い考えもした。学校が楽しいとはこういうことか、とはじめて思ったものである。

コロナ禍の中で、小学校から大学・大学院まで、児童・生徒・学生たちは学校が楽しいだろうか。大学の対面授業もままならず、新入生たちが大学の門さえくぐらなかつた一年が過ぎようとしている。「with コロナ」などというには余りに酷い現実がある。詩人が歌った「新学期」は、いつ戻って来るだろうか（水内喜久雄・編著『教室で読みたい詩12カ月・小学校3・4年』

民衆社、二〇〇四年）。

新学期

小林 純一

新学期、
新学期になって きょうで 三日め、
ぼくは うれしくて しょうがない
んです。

となりの席が あいていて
なんだか 居こちが わるいけど、
机が古くて いたんで
それも いやだと 思ったけど、
もう、なんとも思いません。

新しい教科書 ばらばらばら
なんだか むずかしそうだけど
それも 今では へいちゃらです。

まどから さしこんでくる
春のお日さま、光れ、光れ、
ぼくは うれしくて しょうがない
んです。

なぜって 新しい先生が、
もう ぼくの姓と名を呼んだんです。
ちゃんと おぼえてくれて いたん
です。

らんら、ら。

（かたちは心であり、心はかたちになる
大分の素老人）

、21時事哲学語り事始め

「不安とリスク」の哲学

西暦2020年代の最初の年は新型コロナウィルスのパンデミックで始まった。その世界規模での死者数は現在すでに180万人を突破している。世界の死者が100万人を超えたのが去年の10月。感染は爆発的、つまり指数関数的に拡散するから200万人を超えるのはもうすぐということになる。歴史的なインフルエンザのパンデミックを死者数レベルで比較すると、歴代三位の1968年香港風邪死者100万人をすでに超えており、二位の1957年アジア風邪が死者200万人に迫っている。インフルエンザの歴史的最大のパンデミックは1918年のスペイン風邪である。桁上がり4、000万人以上が死亡したとされている。ここまでは到達するかどうかはともかく今回のCOVID-19は歴史的に二番目のインフルパンデミックになるのは確実である。

昨年2020は「不安の年」、今年は何?

昨年は「新型コロナで開けて新型コロナで終わった」でなく、いまだコロナは続いている。その影響で昨年のこの時事テ

ーマは『パンデミックとインフオデミック』「不安」の感情』『自然と生命』『ポスト、アフターコロナ…歴史とは何か』『経済か自粛かージレンマ』『小説へスト…不条理の哲学』『死と生く人生の意味』『ウィルスの目的論』『ワクチン…医療資源分配の倫理』などすべて新型コロナ関連の時事が哲学テーマとなっていた。そこには「死となにか」「生命とはなにか」など「不安」につながるものが根底にある。

「不安・驚き」から始まる「哲学と科学」

昨年の今頃、突然として人類に未知のウィルス「新型コロナ」がやってきた。人間は未知の対象に対して最初に「不安」を持つ、それは「哲学のはじまり」と同じである。哲学も同じように「驚き」から始まる。古代ギリシャの哲学者プラトンはその著書「テアイテトス」でこう述べる。『なぜなら、実にその驚異(タウマゼイン)の情こそ知恵を愛し求める者の情なのだからね。つまり、愛知(哲学)の始まりはこれよりほかにはないのだ』。その始まりは「不安」や「驚き」であるが「対象」を思考することによって徐々に「不安や驚き」は消えて「探求」のみが残る。現在の医学や科学もこの哲学「自然哲学」から始まった。17世紀のコペルニクス、ガリレオ、ニュートンらの「科学革命」によりだんだんと「科学」が「哲

学」から分離されるようになり、18世紀の「産業革命」を経て19世紀に「科学者」という独立の専門家集団が誕生した。

新型コロナも当初は「未知」だったがゆえに「不安」が広がり世界はパニックに陥った。それからしばらくするとそれはその不安は「慣れ」になってくるが、科学はその対象を「思考」することによって「概念化」し「思考」のうちで「論理的合理性」をつくる。「不安」や「驚き」が「不合理」からくる「感情」であるとするとこの「合理性」は人間の「理性」からくる「安心感」という感情であろう。この「論理的合理性」で「対象」を「説明」するのは「哲学」も「科学」も同じであるが、その違いはこの「説明」の方法の相違にある。科学の説明は「再現可能性」に負うところが多い。つまり「実験」による「対象」の状態の再現である。一方、哲学の説明には対象の再現機能はない。むしろ「概念」によって対象の意味を拡散し他の「概念」との「関係」を広げるといふ機能がある。

神を超えた人間がもつ「自由の不安」

科学は「不安の対象」である新型コロナの「実体」を徐々に「説明」してきた。この合理的説明によって「ワクチン」が作られる。近年は遺伝子操作技術により毒性の少ないウィルスを作り出し、人間

の「免疫力」を高める機能を増強する「ワクチン」が開発されているという。

伝統的哲学は対象としての「実体」を物質的本質である「質量」と形式的性質である「形相」に分けられると考えていた。そういった意味から、現代の科学は「対象」である「実体」としての「COVID19」から「質量」である「遺伝子」を操作し「形相」を変化させ「性質」が変わった新たな「実体」を作り出しているのである。この変化は人間の肉眼では見えないが「装置」を通して確認は再現可能である。近年までこの「実体」を作り出せるのは「神」以外でしかなかった。しかし、現代は「人間」が「神」になったのか、「神」が「人間」に変わったのかどちらであれ、それを可能にした。しかし、「対象」である「物」の創造によって「神」のレベルにまで到達した「人間」でありながらなぜ近代が「不安の時代」といわれているのであろうか。「恐慌」「戦争」「自然破壊」「格差」「疫病」などがもたらす「不安」は増大している。「自然」を改変し「自然」を創りだせる「自由」を獲得した人間がなぜ、それゆえに「不安」になるのか。それは「自由」概念のその二面性にあるように思われる。

二つの「自由」概念と「不安」

人間は「科学」を獲得することにより「自然」からの制約から解放された。飛

行機は重力の制約から解放され自由に空を飛べる。蒸気機関や電気エネルギーは太陽がなくても快適に夜を過ごせるし、寒い冬や、厳しい自然に対抗できる。このように今や人類は自然の奴隷状態から解放され「自由」になったのである。この状態が自由の一つの面「消極的自由」である。この状態からさらに人間は「自由」を求める。それがもう一つの「積極的自由」である。この自由への過渡期が近代社会を乗り越えようとする「現代」であると考えられる。法制度でいえば「自由」「平等」「人類愛」は「消極的自由」であり基本的な人権である。それはあつて当然となり「法」「制度」になり、「守るべきもの」となる。科学も同じで「法」「制度」は「自然法則」「技術」となる。しかし、ここから先の「積極的自由」は「法」も「制度」もない。科学にとつても「自然法則」は「仮説」でしかなくなる。それでも人類は「自由」を求めるのである。今のところそれには「目標」がない。「目的」「目標」のない行為の「意志」の原動力はなにか。それは単なる「欲望」でしかない。明確な「目的」を持たない「行為」の「結果」は「未知」である。それが人類にとって良いものか、悪いものなのか。「結果」が出てからしかわからない。この感情が「不安」であり、その結果の善悪の可能性が「リスク」である。

「不安」から「リスク」へ

毎年、年初の恒例で米国の国際情報コンサルタント会社が当年の世界の10大リスクなるものを発表している。順位等詳しくは述べないが、大まかには、米国の相対的地位低下による「国際秩序のリスク」、そしてサイバーテロなどの「情報化社会のリスク」、さらに新型コロナウイルスを含む「自然災害のリスク」「国際協定のリスク」などである。世界はますます「不安」になり安心できない。

さて、「不安」と「リスク」はどう異なるのだろうか。その前に「リスク」と「危険」の違いを説明しよう。「リスク」は日本語に言い換えると「危険性」というような意味になる。「危険性」とは「危険の度合い」「不確実性」など「悪いことが起こるかもしれない」というまだ現れていない危険、「不安の予期」でもある。さらに「リスク」にはその危険性の原因が主に人間に起因するものをさす場合が多い。つまり、「リスク」は人為的原因によって引き起こされるもので、直接の自然災害の可能性は「リスク」とは言わない。自然災害で「リスク」を使う場合は、その災害を事前に「人為的」に防げない場合を言う。

よって、「不安」は不安のままでは対策できないが、「リスク」は対策できるはずである。しかしそれでもまだなぜ現代は「不安」でありつづけるのか。

「リスク社会」の顕在的「不安」

「リスク社会」という概念は1986年にドイツの社会学者U・ベックによって提唱されたものだ。物質的な困窮が少なくなる一方で、科学技術や産業技術は近代に入ってからどんどん発展していった。同時に第二次世界大戦が終わり、長らく続いた米ソ対立・冷戦の構図にも揺らぎがみえ、ソ連がチェルノブイリ原発事故を起こした時代にベックはこのリスク社会概念を発表した。

リスク社会とは「富の生産と分配」ではなく、「リスクの生産と分配」が大きな社会が立ち向かうべきテーマとなった社会」を指す。この場合のリスクとは「近代化以降、資本主義経済や科学技術や産業技術の発展によって生産された富の再分配が不完全なまま、その弊害（核汚染、自然破壊、貧困、格差など）が均等に拡散する」という意味である。

このリスクは科学的な観点だけでは理解できないことに特徴がある。社会構造、権力構造、行政システムなどと強く関係するからだ。もう一つ考えるべきは「どこまでリスクを受け入れるのか」であり、相対的な概念でもある。経済力のある階層はその「リスク」は回避できるかもしれないが、貧困層は受け入れるままだしれない。しかしリスクはこのような個人の感情や倫理観、経済的地位とは別に、科学的なモノサシもある。科学的に測定

して「リスクです」となれば、それは個人の考えに関係なく科学的にはリスクになる。つまり「リスク社会」のリスクは「科学的な合理性」と「社会的な合理性（個人的な合理性）」とが対立することである。

積極的自由の「リスク」

ベックによると「リスク社会」のリスクには主に三つの特徴がある。一つ目は「リスクがグローバルに作用すること」。新型コロナウイルスでは文字通りグローバル経済の発展により汚染は世界に瞬く間に拡散された。二つ目は「科学的な装備や専門的な知識がリスクを理解するために必要となること」。これも新型コロナウイルスでは「専門家集団」の科学知識が必須となっている。三つ目は「個人化によるリスク」である。リスク社会のリスクはベックによれば環境や生命に関わるものだけではないとされる。近代化によって人々は家族や共同体から切り離された状態（個人化）「消極的自由」状態になり、人生の様々な選択を自己責任で行わなければならないようになっていく。つまり先に説明した「二つの自由概念」の後者、「積極的自由」状態である。それによって発生する生活上の困難や個人ではどうにもならない社会の矛盾も、見方によってはリスクなのだ。これが「積極的自由のリスク」であり、現代の「不安」の根源である。

さて、いよいよ明日1月7日から新型コロナウイルスに関して日本では遅まきながら再び「緊急事態宣言」が出されるという。

新型コロナウイルスが自然破壊というグローバル自由主義経済の結果の「リスク」であるとすれば、この出現は予想された「危険」でもあったはずである。その対策が遅れて「不安」を煽り、また「自己責任」という「リスク」を個人の責任にして「不安」を増幅する。この政策はまさしく「リスク社会」の政治を象徴している。今必要なのは「哲学」（人間理性）と「科学」（政治）（専門家が同じ価値（究極善）の「目的」を求める「意志」を持つことであろう。つまり、科学者も政治家にも哲学的理性が必要であるということである。単なる「欲望」に動かされては「リスク」は100パーセント確実に「危険」となるろう。

大峯奥駈道（38）

下村嘉明

コロナ禍でも身体を動かさないと足腰がさらに弱っていく。老化していく自分の身体を他人ごとのように見ながら、や

るせない気持ちと諦めが交差する。すぐに昨日までの身体の動きや若かりし日のことが頭をよぎり今の自分と向き合えない事が多い。

幸い、私が通う東六甲縦走路は人気が少なくほぼ貸し切り状態である。山だけではないJRも最寄りの猪名寺駅から宝塚駅までもほとんど乗客はいない。そんな訳でコロナに感染する危険性は低い。

私の生活で最も危険な場は買い物時のスーパーだろう。婆さんの介護も感染防止が行き届いた介護士さんと毎日少し話をする具合だから危険性は少ない。そんな訳でこれまでは、何とかコロナに感染せずに暮らしてこれたが、これからどうなるか分からない。

一番に危惧するのは、婆さんが毎日かよう通所介護施設でのクラスター発生である。我が家の生活の生命線は介護施設にかかっているからだ。もし、婆さんを自宅だけで介護しなければならなくなったら、我が家の生活は一変する。これまでのようなのんきな事では済まなくなる。私が小さい頃に見てきた老人介護の状態に戻りたくない。昔と違い、今は介護用品が色々あって便利にはなっているが、介護する人の苦労は多い。

昔の田舎で年寄りが寝たきりになると、大きな家であっても家中に尿臭が漂い、夏場などは家の外からでも、その臭いが分かるほどだった。私が小学生の時、祖母が亡くなり、高校生の時に祖父が亡く

なった。祖父は祖母を懸命に介護し、祖父は母が二年余り介護した。

庭先にはいつも古くなった木綿の着物から作ったおむつが何枚も何枚も干してあった。今のような紙おむつが無かったから洗濯して何度も使っていた。古新聞と木綿のおむつで下の世話をしていた。昔の嫁さんは、ほんとうに大変だったと思う。

この「芥川だより」に創刊以来寄稿して頂いていた眞糶さんも苦労された一人だ。小姑・姑が多い家に嫁ぎ、大勢の飯炊きや洗濯、寝たきりの姑の親の世話から姑の世話へと四人もの介護をしてきた苦労を幾度も聞いた。家の小姑の非協力を腹が立ったが実家に帰ることも出来ず電車を見ながら幾度も泣いたと。眞糶さん曰く「介護はしたもんでなければ、その苦労はわからない」寝たきりの病人の排便処理を毎日ひとりでする時には、病人の両足を自分の両肩に乗せ新聞紙を尻の下に置きおむつを取り替えたそう、想像するだけでもたまらん。

私も婆さんの介護をしていて嫌になる時があるが、母や眞糶さんの姿を思い出し「この程度で弱音を吐いていたらどうする！」と自分を叱咤する。こんな事を考えると、何としても自分は最後まで歩ける状態になりたいと思うから、運動を続けている。しかし、思うようにいかないのが世の常だから先の事はわからない。分からないから頑張るしかない。

大人の今昔物語（75）

石川 吾郎

今回は、奈良の寺の高僧の娘の元に、高級官僚が通う顛末。教科書に出ない度は四／五。

大安寺の別当の娘のもとに蔵人の通う話（巻第十九 第二十）

今は昔、大安寺の別当で、某という者がいた。その娘に顔立ち美しく、立ち居振る舞いも申し分ない女がいた。この娘のもとに蔵人の某という者が、毎夜人目を忍んで通っていた。相愛となり、互いに離れがたくなったので、蔵人は時に昼間もとどまり自宅に帰らぬときもあった。その日も蔵人は女のもとにとどまり、昼まで寝ていた。すると男の夢の中で、この家の者、主人から下人まで急に大声で泣きはじめた。なぜこんなに泣き叫んでいるんだらうと訝しく思い、様子を見てみると、舅の僧と姑の尼君をはじめその家の者たちがみな、大きな器を捧げ持って泣き叫んでいる。ますます不審に思っ、よくよく見ると捧げもつた器には銅（あかがね）の湯が入っているのだ。鬼に責められて煮えたぎる銅の湯を泣く泣く飲まされているのだ。やっこのことで呑み終えると、また自分から望んで呑む者もいる。下男下女までこれを呑

まぬ者はいない。

自分の横で寝ている娘も、女房がやってきて呼ぶと、娘は起きて家の者たちの中に入っていく。訝しくよく見ると、この娘にも大きな銀の器に銅の湯をいっぱいに入れて、女房が渡すと、娘はこれを受け取ってか細く愛らしい声をあげて泣く泣く呑むと、目耳鼻から焰（ほのお）と煙が出る。あつけにとられてこの光景を見ていると、「客人に差し上げよ」と言つて、銅の湯を器に入れて台に据えて、女房がもってくる。このとき「自分もこんな物を呑むはめになるとは」と、慌てふためくと思うと、そこで目が覚めた。目が覚めてみると、女房が食事を台にすえてもってきたのだ。舅のいるほうからも食事をして会話をしている声がかえってくる。このときに思うに「寺の別当」というものは、寺の物を私物化して使っている。寺の物を食べているのだから。それがこのように見えるのだ」と。こう思うと疎ましく思えて、娘を思う心もみるみる萎えてしまった。

が強くなり、出家するとまでの志はなかったものの、いささかの信仰心が起り、寺の物などは不正に私物化することは許してなかったと語り伝えられている、ということだ。

《コメント》

この蔵人が娘の家、つまり大安寺の別当の屋敷に通わなくなる理由は、恐ろしい夢を見たからなのですが、この夢の意味は何なのでしょう。

銅の湯、つまり高温で溶融した銅を呑まされるという壮絶な罰が、別当とその家人一同に与えられるというものです。この背景には、別当が不正に寺の所有にかかる物などを私物化している、という認識がこの主人公の蔵人にはある。そして別当の娘のもとに通い続けることは、自分も別当の一族に加わることになり、これは同様の罰が自分にも及ぶことになる

と察知したこと他なりません。

ですがこの「罰」とは、倫理的なものというよりは、仏に属する物を不正にわが物としているという宗教的な意味合いが強いように感じます。

しかし捨てられた娘にしてみるとどうでしょう。なんの外的な原因もなく、ほとんど夫として通っていた蔵人が突然、来なくなりました。娘の立場は、何とも気の毒なかぎりです。

新型コロナウイルス禍愚考(その9)

明石 幸次郎

新年になっても、人間の慣習とか希望的思惑などとは関係なしに、コロナ感染拡大は各国で続いています。その中で、色々な思惑でタイムリーな政治的決断が出来ない指導者を持つ何処かの国民は、もどかしさ、不安定感を感じながらも騒ぎたてずに大人しく自粛生活を送っています。

医師会、政府、自治体の首長、専門家などは、このまま、感染拡大が続くと、医療崩壊が起きると強い警告を発して国民に危機感を持って行動するように連日、マスコミを通じ発しています。

コロナ感染は無論、大きな病気、事故で怪我などしても、病院をたらいまわしにされるケースを報道し、これでは、コロナに感染しても、病気になるっても、罹った当事者の予防への努力が足らず、まるで経済的弱者と同じ論理で、あたかも国民の自己責任のような突き放した感じを受けて仕方ありません。

それで、善良で大人しい国民は、何となく空気を読んで、自粛をして不要、不急の外出は避けようとしています。暇をもてあました元気な中高年は、久し振りでからと言つて、このご時勢？に、しなくとも良い？ような、飲み会、ランチ会、遊び、旅行などをしようとして、家族、

知り合いに声を掛けようとするが、相手の空気を察して、気まづくなるので、止めようと自主規制をかけて、年末、年始もステイホームをしています。

年末にドイツに住んでいる愚息からライン電話があり、「日本も感染拡大で第三波とか言われているが、こちらは連日一万から二万人の陽性者が出て、日本とは一桁も違うが、日本で報道している様な、医療崩壊が起きるようなことは、ここでは、何にも報道されていないよ。日本は政府が自国民を信用していないから、マスコミと一緒に脅かしているのと違う？なんかおかしいよ。

この前、メルケルさんが、これ以上の感染拡大を防ぐため、国会で国民に訴えてクリスマス休暇は、家族、親戚、仲間の大勢が集まるのを避け、少数数でお祝いして、来年は、皆でお祝いしよう。その為今年に今年にクリスマスはおじいちゃんおばあちゃんとは会うのは、がまんしよう、と自分の言葉で心から国民に丁寧に訴えたので、この前と同様、外出は控え、食料品、日用品以外店は休業して、原則五人以上は集まらないようにしている。ドイツ人にとってクリスマスに家族、親戚が集まり、お互いにプレゼントを交換して、食事をするというのは、一大イベントで日本のお正月の集まり以上に大事にする感覚やから、それを、縮小して、少数の家族だけで祝うというのは大変な自制を国民に課すことになる。メルケル

さんもそれなりの政治家としての覚悟、決意で臨んだようやわ！それに比べて、日本の首相は何やしら、ふわっとした存在で、話をするにしても、原稿を棒読みしながら、言っているやないか！自分の言葉で喋ってないやんか！感染症対策も三蜜を避け、五人以上の会食はするな、手洗い、マスクをせよ、とか言いながら首相自ら毎晩会食をしているやん。もし、メルケルさんがそんな事をしたら、倒閣運動が起きて暴動になるやろなあ。日本人は大人しいし、マスコミも厳しく追求しないからなあ。マスコミの中のそれこそ空気を読んで、付度し自主規制がかかっているのと違う？

皆が周りの空気ばかり読んでるから、自肅的休業要請だけで店が閉まり、その後で、補償問題が議論される。ドイツ人の友達に聞いたら、この前、政府からの休業要請に応じて、休業補償をネットで申請したら、二日か三日後に百万円くらいが振り込まれていたようや。日本で言う、給付金も家族の名前でネット申請したら直ぐ振り込まれたよ。まあ、とにかくこちらは税金が高いが何かあれば、それに見合う国からの対価があるから、国民は、政府を信頼して納得して要請に応じているんやろなあ。

病院もこの非常時やから、色々政府の要請に応じた対応をしているみたいで、それは、当然の自分達の仕事における責任と義務としてやっているようで、一々、

取り上げて、政府は言っていないのと違うかなあ？イタリアが重症者で溢れたこの春は、軍隊が持っているエアバスを改造した二十人くらいの人口呼吸器付のベツトが備わっている大型飛行機を何機か派遣して救援活動をしたようなことは、報道はしていた。ドイツの友人も軍隊も良いことすると言っていた。ところで、大阪も感染が拡大しているようなので、気をつけてなあ」と言うことで愚息に心配された。

外国から日本を見ると、日本の良さ、悪さ、問題が良く分ると言われますが、愚息は十年ほどドイツに住んでいて、家族も設けているが、たまに帰国すると家族の者に言っているのは、日本の税金の使いわれ方がおかしい、政治家が政治をしていない、官僚が決めているのに、国民が何も言わず、政治に無関心である。特に、若い者が政治に無関心だし、政治を語ることが、ダサイとか言って、何も議論もしない。関心があるのは、お笑いか、芸能人、仕事とお金のことだけや。ドイツの若い人は、結構、家で集まった時とか、バーなんかで、政治についても自分達のこととして熱く語っているとのことである。

このまま、コロナ禍が長引いても、非常時にも関わらず日本は何も根本的な医療体制システムを変えずに、小出しに官僚の作った付け足しの法律でお茶を濁し、十萬円の給付金だとか、役立たずのアベ

ノマスク（している人は見たことがない）少しだけの休業補償、GOTO 何とかを再開させる等などの延長でコロナ対策と称して選挙の為の目くらませ対策？が打たれようとしています。

それは責任意識が欠如し、感染症専門家の意見を理解出来ない文科系実力政治家と、間違ったことは、したことが無いと思込んでいる有能な官僚、経済を動かさない失業者が出て大変なことなる自分達の大企業のことだけを考えている経済界、それと医療体制を変えたくない医師会がスクラムを組んで、彼らが権力を持ち、この国を動かして皆から集めた税金を使うことを今まで通りの発想で決めるのだと思うと、電話相談と又違ったしんどさが、新年から我がこころを勝手にしんどくさせている。

オクラの山たより (52)

困了生

一

蕪村自身が編集した「蕪村句集」に「鉢叩き」を詠んだ句が「谷入れて 香におどろくや 冬木立」という名句の直後に六句おさめられています。

「鉢叩き」とは京の空也堂に拠点を置いて十一月十三日の空也忌より四十八日間、毎夜二、三人で瓢箪や鉦を叩いて唱名念仏して洛中洛外の墓所をまわり、そして京の家々を勧進して回った人々のことです。普段は茶筌を作り、それを売って生活していた人たちですが、その生活はかなり苦しかったであろうと想像できます。年末の夜に瓢箪を叩いて回った鉢叩きは京の冬の風物詩ともいえるもので俳諧にも多く取り上げられています。たとえば松尾芭蕉にも次の句があります。

1 長嘯の墓もめぐるか はち敲(たたき

この句が作られたのは一六八九（元禄二）年も押し迫った十二月二十四日のこと。郷里の伊賀から京にやって来た芭蕉の目的は鉢叩きが竹で瓢箪をたたきながら念仏や和讃を唱えながら勧進して回るさまを見ることにありました。ところが北風が強い上に冷たい風が吹いていたためか、一晚寝ずに待っていても鉢叩きは来ません。やっと夜が明けた頃に「からびた声」を出しながらやって来ました。そこでこの句が生まれたというわけです。

「長嘯」とは豊臣秀吉の正室北政所の甥で小浜城主であった木下勝俊こと木下長嘯子のこと。関ヶ原の戦い後没落した勝俊は京都東山に隠棲して文人らと交じ

らい和歌などを詠みました。文学史の上では「古今伝授」という和歌の伝統を批判・否定し、庶民にも和歌の世界を広げた人として評価されています。「墓をめぐるか」は東山高台寺にある木下長嘯子の墓をお参りしてから来たので、こんなに遅くなったのですか、の意。少しばかり遅かったじゃないか、という軽い呼びかけのような句です。この句が生まれたのは「おくのほそ道」の旅の直後といえる時期です。それは奥州の旅から得た伝統的な詩歌風の「古び」を反省して「安らかな表現」をめざした志向、「軽み」への志向が始まる時期でした。

その時期の作だけに、芭蕉の死の直前の作であり「軽み」の到達点ともいえる次の句

秋深き 隣は何を する人ぞ

と同じく口語のような表現で句作したあたりにもそれはうかがわれます。

さらに鉢叩きに関する芭蕉の句には次の句もあります。2の句、3の句、ともに元禄三年頃の作。1の句とほとんど同時期の作です。

2 納豆切る 音しばし待て 鉢叩

3 乾鮭(からぎし)も 空也の瘦せも

寒の内

2の句はトントンと納豆を切る音を出

すのはしばらく止めてほしい、鉢叩きが瓢箪を鳴らす音を聞きたいから、という内容の句です。納豆と鉢叩きを同列にしている点が気になりますが、寒夜に鉢叩きが鳴らす音にじっと耳を傾ける芭蕉の思いが伝わってきます。

3の句は芭蕉自身の真蹟が二つ伝わっていて、そこには「都に旅寝して鉢叩(たつき)のあはれなるつとめを夜ごに聞きはべりて」あるいは「鉢たたきの歌」と書かれています。服部土芳の「三冊子」によれば芭蕉はこの句について「心の味を云ひとらんと数日腸(はらわた)を絞るなり」といったといいますから、よほど苦心した作なのでしょう。「心の味」とは事物の姿のうちに潜んでいる本質的なものの「にほひ」つまり象徴のことでしょう。鉢叩きの祖とされるのは踊り念仏

で有名な市の聖こと空也上人。今も六波羅蜜寺に伝わる空也の像は痩せこけた姿をしています。その痩せた空也が修行に歩く姿と干からびた乾鮭とを枯れきった寒さの中においています。底冷えのする冬の京の空間が感じられますが、区全体をキュッと引き締めている「K」の音の連続が効果的です。なお、この句は連句集「猿蓑」に入れられていて、この句の後に門人の乙州は

鉢叩き憐れは 顔に似ぬものかと付けています。鉢叩きの音は憐れを催

すのだが、現実の鉢叩きの顔を見れば無骨で恐ろしい男だったりして、どうも「憐れ」とは不釣り合いだ、という内容です。芭蕉の句のピンと張り詰めた空気をなごませる滑稽さをねらった句ですが、この句には鉢叩き自身の心情にまで踏み込んだというふうには思えません。

二

以上のような芭蕉の句に対して冒頭に書いた蕪村の句は次の通りです。いずれも名句とはいいいくのですが、蕪村の人柄が出ている句です。

- ① 鳴らし来て 我が夜あはれめ 鉢叩き
- ② 一瓢の いんで寝よやれ 鉢叩き
- ③ 木のはしの 坊主の端か 鉢叩き
- ④ 夕顔の それは鬮か 鉢叩き
- ⑤ 花に表太 雪に君あり 鉢叩き
- ⑥ 西念は もう寝た里を 鉢叩き

①の句は瓢箪を鳴らしに来て、お布施もあげられない私のわび住まいの夜を、せめてあなたの鳴らす音で慰めて欲しい、という句意。あなたも日ごと苦しい生活をしているでしょうが、私も苦しいのだよ、といっているわけです。蕪村の生活の苦しさは前にも述べましたが、それ以上に苦しい鉢叩きの境遇を思いや

っている風にも読めます。②の句は「去(い)んで」と「飲」を

掛けた句であり、「一瓢」は「論語」の「一簞食、一瓢の飲」から来ていてわずかな飲食物で十分に満足していたという意味。孔子最愛の弟子であり高潔さにおいては弟子中の第一とされた顔回が清貧に甘んじていたことを形容した語です。ここから②の句意は、清貧に甘んじながらも寒い冬の夜にまじめにお勤めしている鉢叩きさん、あなたが持っている瓢箪にわずかですが酒を入れてあげるから本当に寒い今夜は一杯飲んでお休みなさいよ、となります。鉢叩きの境遇に寄せる蕪村の思いが伝わってきます。

③の句の「木の端」は清少納言の「枕草子」に「(僧は)烏帽子・冠なきばかりに、木の端などのやうに人の思ひたるよ」から来た言葉で「価値がない、つまらない」という意味。②の句は、清少納言は僧侶を「木の端」と思ってはかわいそうと同情したが、半僧半俗の鉢叩きは坊主のさらに端といわれるかもしれないのは、あまりに気の毒だ、という内容となります。ユーモラスに表現していて深刻さはありませんが、やはり鉢叩きの境遇に心を寄せた内容です。

④の句は一休禪師が絶えず無常の象徴として鬮を持ち歩いたという逸話がベースにあります。鉢叩きが叩き歩く瓢箪は、夕顔の実の鬮だ、と強調した滑稽さを出した句です。⑤の句の「表太」は元禄の頃にいた京の風流人表具屋太兵衛のことで桜の花の

もとで瓢箪型の銀の杯で酒を飲んで楽しんでんだといえます。昔には風流人表太がいて今は雪夜に干からびた声の鉢叩きがいる、という句意でしょう。「君あり」という言い方には君らあつてこそ京の風雅はある、という称賛の意があるように見えます。

⑥の句の「西念」は俗臭ブンブンの凡僧の名です。句意は俗臭にまみれた凡僧がぬくぬくとした布団の中で寝てしまった寒い京の郊外を今夜も鉢叩きはめぐり歩いているよ、というもので、鉢叩きの境遇への同情心が垣間見えます。

また、「蕪村遺稿」には次の句もあります。

子を寝せて 出ていく闇や 鉢叩き

鉢叩きの厳しい生活が浮かび上がってくるような句です。

以上、滑稽さをねらった句もありますが、元禄期の芭蕉に比べると蕪村の句は鉢叩きが置かれた状況と彼らの心情に心を寄せた作品が多いように感じられます。その蕪村が見たであろう鉢叩きの姿は時代によって少し変化しています。

鉢叩きの風体は中世から元禄の頃は鮮やかに彩られた紋付の小素襦（こすおう）武士の礼服である素襦だが袴がくるぶしまでのもの、風のを小袖の上に着ているという芸能的な装いをしました。今でもわずかに残っている三河万歳の演者の風

体とよく似ています。しかし、蕪村の頃になると頭は髷を結った俗体となったのですが、上衣は墨染で無紋の僧衣風のものであり「都名所図会」などで見ると頭巾をかぶった者もいます。彼らは茶道で使う茶筌をホウキにさして肩にかけ、そのホウキに瓢箪をぶら下げて、手にした竹の棒で瓢箪を叩いていたように見えます。頭が坊主頭ではないのは鉢叩きが半僧半俗であるためですが、彼らは僧侶でもなければ町人でもないわけです。この中途半端な姿をした鉢叩きは身分制が厳しいとされる江戸時代の社会の中でいったいどこに位置づけられていたのでしょうか。この点をもう少し見ていき、蕪村が鉢叩きに寄せる思いの理解を深めようと思えます。

三

さて、四条堀川に京都市立堀川高等学校があります、その東側に隣接して空也堂という寺院があります。ここが鉢叩きの依拠した本拠です。一六八六（貞享三）年刊の京都の地誌を記した「雍州府志」には次のようにあります。

（空也堂は）空也上人の開基にして、

則ち、自ら刻む所の肖像を安置す。この院内の一老を上人と称す。魚肉を食らわず、妻子を携えず髪を剃り、衣を着ず。その余の十八家は、髪を剃らず、

妻子を携え、常に茶筌を製し市朝に売る。：中略：およそ十八家の人、厳冬寒夜に至りて、毎夜洛外の墓所・葬場を巡り、各々竹枝をもって瓢（ひょう）をたたき、声高に無常の頌文を唱う。これを修行となす。よりに鉢叩きと称す。

これが「鉢叩き」と呼ばれた人たちの近世における最も知られた姿でしょう。つまり、鉢叩きは空也堂という「寺」に集住しており、その中の一老＝上人が僧体である以外は皆俗体で妻子を持つていたことが分かります。そして、日常は茶筌を作って売り歩いていましたが、冬の夜には瓢箪を叩いて「無常の頌文」を唱えつつ、洛外の墓所・葬場をめぐって「修行」し、そのため「鉢叩き」と呼ばれたとあります。そして、この「修行」は十一月十三日の「空也忌」に堂で法事を行ったあと、十二月晦日まで昼夜二回市中を勧進し墓場・葬場をめぐるものでした。

考えてみれば不思議な人たちです。空也を祖師と仰ぐ「寺」＝空也堂を構えているながら、一人を除いて有髪妻帯の俗体であり、念仏修行に勤める一方で茶筌業者でもあるという存在が鉢叩きです。

この鉢叩きが史料の上での初見は室町時代の初め一三五四（文和三）年の奥書を持つ「融通念仏縁起」の現存最古本です。そでの鉢叩きは瓢箪と棒を持ち踊り念仏をしている乞食風の姿をしていま

す。また別の写本では、その足元には投げ銭も見えて鉢叩きがこうした多くの庶民を集める仏教行事の場で勧進のための芸をする乞食的芸能者として登場したことが分かります。

その後、室町時代後期に制作された「七十一番職人歌合」の「鉢扣（たつき）」では、束髪に褐色の短袖を着て裸足という姿で瓢箪を叩いています。しかも、その脇には空也上人を象徴する鹿角（わさづ）が描かれていて、この頃には鉢叩きと空也上人を彼らの祖とする伝承ができていたことを示唆します。ただし、この頃、鉢叩きが集住した地は京の市中に複数あり、諸宗派の寺院の支配を受けつつ寺社での勧進（踊り念仏をして見物人から投げ銭を得ること）が彼らの活動の中心であったようです。

これが戦国末期のとなると都市京都の発展とともに踊り念仏という芸能と茶筌業という商売とを自らの生業として自立させながら諸派寺院の支配から抜け出していくこととなっていきました。それは彼らが遊行的な存在、つまり一つの寺に属さず全国を行脚する僧侶のような社会的には極めて不安定な存在となることを意味しました。そのため、彼らは「日本人が物貰いと言っているもの、または日本でも最も下賤な者どもとして軽蔑されているもの七種類たる：中略：七乞食」の一つとされていたとキリシタン宣教師のロドリゲスが「日本大文典」（一六〇四

年 長崎で出版された日本語文典で書いています。一つの場所に定住せず竹細工で細々と生計をたてながらも一方では瓢箪を叩いて踊り念仏といった芸をして物乞いのごときことをする彼らに対して当時の人々の視線は厳しいものであったのでしょう。

時代が下って近世では、寺院の支配から自由となったはずの鉢叩きは先ほど述べたように京の空也堂を本拠にして活動しています。それは幕府が遊行的な宗教者（一つの寺に属さず全国を行脚する僧侶のこと）の定着を図り、在家での宗教活動を禁止する宗教政策を展開していたためであると近世史家は説いています。つまり、僧侶はいずれかの寺院に属することによって僧侶という社会的な認知を受けるのだ、というのが幕府の基本政策であり、京の鉢叩きたちはこうした情勢の中、基本的には宗教者として近世社会の中に自らを位置づけるために自分らが空也堂という寺に定着する人であること世に示すことを図ったのでしょう。

その後、十七世紀末頃から十八世紀にかけての全国的な庶民経済の急成長は庶民の観光ブームを呼び、京都も観光地化していききました。たとえば金閣寺が入山料を取るようになったのは江戸中期であるといえます。その動きに便乗しようと空也堂も寺容の整備とともに自己を他の寺と差別化し、人々の耳目に訴え、収益を上げるために「空也由緒の寺」を売り

出すイベントとして空也が行ったという踊り念仏を始めました。歓喜踊躍念仏といわれたそれは評判となって空也堂はその本山とされたのです。

しかし、それだけではまだまだです。空也堂に集う鉢叩きたちにとつての悲願は本山である空也堂を拠点とした鉢叩きが宗教者集団として独自の身分の認定を幕府から得ることでした。彼らの思いのモデルとなったのは中世起源の遊行的な宗教者であった虚無僧です。虚無僧はもとも十五・十六世紀に存在した尺八吹奏を専業とする乞食芸能者でしたが、十七世紀初めに普化禪師に帰依する僧侶として現われ、一六七七（延宝五）年に虚無僧が普化宗寺院法度で幕府から公認された。独自の身分を得ました。何とか普化宗の虚無僧のように身分保障され人々から賤視されない存在になりたい。これが鉢叩きたちの心から願うことでした。

しかし、江戸時代を通じて、この鉢叩きたちの悲願はついになかうことはなく、明治を迎えます。

明治新政府は既製宗派に宗教活動を収束させる宗教政策をとり、空也堂は「鉢叩き念仏」の本山を名乗ることができなくなつたため、鉢叩き集団も解体への道をたどりました。筆者の知る限り、冬の京都の町で鉢叩きの声を今は聞くことはできません。

なお、鉢叩きは京に限らず地方、特に中国地方に多く存在し、彼らは鉢屋、茶

筥、隠坊（おんぼう）と呼ばれていました。主たる生業は農業と竹細工であり、地域社会において最下層の人と位置づけられたために行刑や牢番等の仕事につくこともありました。年末には茶筥を配つて勸進して回つた中世のなごりのような動きをしている「茶筥」もあります。おそらくこれらの人々は中世の遊行的な念仏芸能者であった人たちの末裔であり所属する身分が不明瞭なために下層民化していったのでしょう。

四

ずいぶんと長くなりましたが、空也堂の鉢叩きが以上のような状況であれば、彼らの境遇と心情に心を寄せる蕪村の思ひも幾分かは理解できそうです。

少年期の一家離散と母の死の記憶。そして師である巴人の師。辛かった奥州の旅。以前にも書いたことですが、俳諧師はしっかりとした身分の保障もなく、どうかすると座敷乞食と蔑視される存在でもありました。実際、たとえば京の有名な人を網羅した一七八二（天明二）年刊の「平安人物志」には俳諧というジャンルはなく、蕪村の名は円山応挙、伊藤若冲と並んで画家という項目の中に見ることができません。俳諧の宗匠は句会の中ではもてはやされたとしても天明期の京の社会では名士とはいかなかったのです。

蕪村の中に以上のような記憶があった

だけではなく、作品を面白くしようという意図があったかもしれないことは否定できません。しかし、やはり、次の句を作つた蕪村だけに鉢叩きに対する温かい視線があつたように思えるのです。

百姓の生きて働く 暑さかな

蛇足ながら、萩原朔太郎は「郷愁の詩人と謝蕪村」で、この句の「百姓」を農民と狭くとらえず、人間一般ととらえるべきであるとしています。聞くべき卓見でしょう。さすが日本近代文学史上にあつて第一級の詩人です。

隠された歴史（27）

満田正賢

前回から九州王朝の変遷を考古学的に検証しています。今回は、後漢書に記された金印を授けられ五〇年後に生口百六十人を献上した倭国王帥升の国と、魏志倭人伝に記された女王卑弥呼・耆与の国の場所を、博多湾岸にある同時代の遺跡によって検証しました。今回は倭の五王のいた場所を考古学的に検証します。

通説では倭の五王は日本書紀に記された近畿王朝の天皇であり、特に稻荷山鉄

劍や江田船山鉄刀の銘文にある名前「ワカタケル」によって、倭王武が雄略天皇であるのは間違いが無いと断定していません。一方、古田史学では倭の五王のいた場所を久留米周辺、具体的には筑後一宮である高良大社および高良大社の主神たる高良玉垂命がいた大善寺玉垂宮と推定しています。

通説論者が稲荷山鉄劍や江田船山鉄刀の銘文にある名前を「ワカタケル」と読み取ったのは、倭王武の上奏文を近畿王朝による日本統一の経緯と理解したことが背景にあります。そしてその理解は、年代的に雄略期が倭王武の時代に重なり、なおかつ日本書紀の雄略紀に呉への使者の派遣記事や多くの朝鮮半島記事があることによっています。しかし、私は、「隠された歴史(十三)」において、「雄略紀は日本書紀の他の条のように、朝鮮半島の史書に実際に記された未詳な人物を近畿王朝の人物に置換えて話を作り上げるという手法をとらず、国内記事の舞台を朝鮮半島に移し、日本が朝鮮諸国の目上にいたということを露骨にアピールしている点で、日本書紀全体の中でも極めて悪質な作文である」と考察し、倭の五王の中で特に通説では間違いないとされる「倭王武Ⅱ雄略」説を否定しました。

倭の五王が筑後にいたことの第一の考古学的証拠は、筑後・高良山の列石遺構・神籠石(こうごいし)の存在です。

日本書紀には、白村江の後、天智四年(六六五)に「長門国に城を築く」「筑紫国に大野及び椽の二城を築く」(天智九年に重複記事あり)、天智六年(六六七)に「倭(やまと)国に高安城・讚吉(讚岐)国山田郡に屋嶋城、対馬国に金田城を築く」と記されており、続日本紀には養老三年(七一九)に、「備後国安那郡に茨城、蘆田郡に常城を停(とど)む」と記されています。この日本書紀・続日本紀の記事によって示された場所にある列石遺構は「長崎県対馬・金田城」「福岡県大野城」「福岡県・佐賀県の県境にある基肆城」「山口県長門城」「広島県茨城」「広島県常城」「香川県屋島城」「奈良県・大阪府の県境にある高安城」として、朝鮮式山城という範疇で名づけられています。

一方同様の列石遺構であっても日本書紀に記されていない遺跡は神籠石として区別され、高良山のものも最初に名付けられて以降、北九州および瀬戸内地方に一六箇所ほど見つかっています。近畿で見つかっているのは播磨・城山城のみで、それより東の地域では見つかっていません。神籠石は、古くは神域を囲んだ遺跡ではないかなどの説もありましたが現在では朝鮮式山城と同様のものであるという説が有力になっています。

ところで、日本書紀に記された朝鮮式山城築城の目的は、通説では白村江敗戦(天智二年(六六三)後の唐の侵略を防衛するためと説明されていますが、唐の

占領軍の長たる郭務倞は天智四年(六六五)に日本に派遣され、天武元年(六七二)壬申の乱の直前に日本を去っています。特に対馬にある金田城や大宰府の後ろにある大野城はそのような状況下で築城されたとは考えられません。白村江以前に大宰府防衛のため築城されたと考えべきものです。そうであれば、北九州全域にある神籠石も、白村江以前に九州にあつた重要な拠点を防衛するために作られたと考えることが出来ると思います。

高良山神籠石は、各地の神籠石の中でも全長二・五km(三km)、列石線が残る南半部だけでも一・五kmもある長大なものです。最高所は高良大社が鎮座する本宮山で標高二五・一m、最低所は標高六五mで標高差は一八〇mもあります。列石は加工され方形に仕上げられた切石であり、一個の大きさが平均八〇cmもある石で造られた巨大遺跡です。高良山神籠石は高良大社に逃げ込んだ支配者を守る為に造られた巨大な山城であると考えると納得がいきます。

私は二〇一八年一月に久留米を拠点にして福岡県の遺跡を廻りました。高良大社には幸か不幸かバスで行ったので、一の鳥居(石造大鳥居)から延々と四〇〇段も続く石段を登ることになりました。石段の途中には近世以前に「神籠石」と呼ばれていた「馬蹄石」(磐座(いわくら))などがあり、古代の雰囲気を感じさせる風景でした。

この高良大社は延喜式では名神大社「高良玉垂命神社」として記載されており、国内最古の神名帳とされる「筑後国神名帳」によると、祭神である高良玉垂命は、朝廷から正一位を授けられたとされていますが、記紀には全く登場していません。しかし、鎌倉時代に成立した「八幡愚童訓(はちまんぐどうきん)」には、神功皇后の三韓征伐の際に諏訪・熱田・三嶋・宗像・厳島神達三百七十五人を梶取鹿嶋大明神、大將軍住吉大明神、副將軍高良大明神が指揮して船に乗り込んだと書かれており、高良大社は全国ナンバー2の高い位置づけをされています。そのような神社の祭神に記紀が全く触れていないことが、逆に高良玉垂命は記紀が隠した存在ではないかとの疑惑を生じさせます。

大善寺玉垂宮は、久留米市三瀨(みずま)にあります。雄略紀に記された身狭村主青(むさのすぐりあお)と檜隈民使博徳(ひのくまのたみのつかい)はかこの呉国派遣記事に、呉の献じた鷲鳥が「水間の君」の犬に噛まれて死んだという記述が出てきます。この「水間の君」は「別本では『筑紫の嶺の県主泥(ね)麻呂』と記されている」と記されています。この「水間の君」は景行紀に出てくる「水沼縣主」と同一ではないかと考えられています。この「水間」「水沼」こそが「三瀨」です。記紀にもこの場所は見え隠れしているのがわかります。さらに古田史

学の会代表の古賀達也氏は、万葉集四二一六番歌（読み人知らず）の「大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ」に現れる「都となった水沼」はこの三瀧のことであろうと推測しています。また古賀氏は太宰管内誌に「玉垂宮の座主がいた坊跡を天皇屋敷と名づけている」という記述を見つけています。

大善寺玉垂宮では毎年正月七日に日本三大火祭りの一つとされる鬼夜（おによ）が行われます。私は二〇一九年一月に佛教大学宗教文化ミュージアムで行われた「大善寺鬼夜・記録映画」上映会に参加しました。（古田史学の会史跡めぐりハイキングの一環でした。）面白いのは、鬼夜祭の主祭である鬼面尊神は漆塗りの箱に収められて神殿に安置されており、鬼夜の時だけ鬼堂に一旦移されたのちに、多くの松明が神殿を廻る祭りの絶頂のあと、社前の川で禊ぎをして神殿に戻るという一連の祭りの流れです。この祭りでは「鬼」は畏怖と同時に尊敬の対象となっているのがわかります。

なお、久留米市にある筑後国府跡からは最古の「曲水の宴」の遺構が発見されています。

次に筑紫の君磐井の墓とされる岩戸山古墳と八女古墳群の話に移ります。私は「芥川だより」に最初に寄稿した「今城塚古墳と磐井の乱」において今城塚古墳と岩戸山古墳の類似性に触れた上で、次のように考察しました。

「今城塚古墳を天皇陵として特徴付ける埴輪祭祀場「舞台」は筑紫君磐井の墓たる岩戸山古墳にも存在します（*石人石馬が置かれた別区のこと）。ではどちらが先に出来たものでしょうか。磐井は日本書紀によれば継体天皇崩御の三年前に物部鹿火に殺されています。岩戸山古墳は磐井の生前に作られ、磐井の死亡時には完成していたと考えなければなりません。今城塚古墳も一万本近い円筒埴輪の制作に優に二年、築造には四〜五年かかるとみられ、殯の期間十ヶ月ではどうも間に合わないため継体天皇の生前から準備されていたものと思われまゝ。しかし磐井が、完成した継体天皇陵の姿をみてそれをまねて自らの墓を準備したということはありえません。一方継体天皇は、物部鹿火から完成された立派な磐井の王墓の報告を受け、造成中の自らの墓を偉大化する目的で、その技術を盗んで規模的には遙かに大きな規模で完成させようと思いついたということが十分に考えられます。」

東京国立博物館の河野隆一氏も動画「装飾古墳入門」で、九州の横穴式古墳が近畿に広まったのは継体大王時代であると、また今城塚古墳と岩戸山古墳の類似性（墳形の相似と副葬品の類似）に触れています。

私は高良大社に行く前に、久留米からバスで「岩戸山歴史文化交流館」に向かいました。「岩戸山歴史文化交流館」を訪

問して新たな発見がありました。第一に岩戸山古墳は東西約十一kmに広がる丘陵地にある八女古墳群（乗場古墳 石人山古墳 岩戸山古墳 善蔵塚古墳 弘化谷古墳 丸山塚古墳 丸山古墳 茶臼塚古墳）の一つとして考察しなければならぬことです。第二に展示されている石人石馬は岩戸山古墳から直接持ち込まれたものではなく、切断されて八女・福島城の石垣に使われていたものを移設したものであり、厳密に言えば筑後風土記に記された継体軍による磐井の墓の破壊は考古学的には実証出来ていないという説明を受けたことです。第三に、展示されている説明板に、八女古墳群は、年代的に見ると岩戸山古墳の後、石人石馬古墳から装飾古墳に変化していることから、当地の支配者が筑後地方の勢力に置き換わったと見られるという説明がしてあることでした。

岩戸山古墳は全長百七十mの九州北部最大の古墳ですが、久留米市三瀧には御塚古墳（全長百二十三m）、権現塚古墳（全長百五十m）と、大正元年に破壊されたがその両古墳より大きかったとされる銚子塚古墳があります。八女古墳群と三瀧の各古墳は倭の五王とその一族の墳墓であったと想定されます。もちろん近畿には同時期に大仙古墳などこの規模を大きく上回る古墳が多数存在します。しかし、古墳築造には多くの労力を費やさなければなりません。朝鮮半島での覇権争いを

繰り返していたこの時期に、大仙古墳規模の古墳築造に大きな労力を費やしていたということは逆に考えにくいことです。古墳製造に費やした労力を考えると、この規模が精一杯だったのではないのでしょうか。

次に、私が「磐井の乱」によって倭の五王・磐井と続く前期九州王朝が滅ぼされ、継体・安閑・宣化と続いた後、宣化の子が那津官家に遷都し後期九州王朝を創立した」とする根拠について触れたいと思います。

第一に高良大社の祭神と神職についてです。延喜式の名称によつて高良大社の祭神が高良玉垂命であることは間違いありません。しかし現在の高良大社には正殿・高良玉垂命、左殿・八幡大神、右殿・住吉大神が同格で鎮座しています。私は「隠された歴史（十六）」で住吉・八幡信仰は、継体が磐井の乱のあと筑紫の人々の支配のために持ち込んだイデオロギーであると考察しました。高良大社の祭神は、継体が磐井を滅ぼしたものの前期九州王朝の遺産を引き継ぐため前期九州王朝の遺臣たちとの共存を図った証拠と考えられるのではないかと思います。それは高良大社の神職からも読み取れます。高良大社の神職は、丹波・物部・安曇部・草壁・百済の五姓です。高良大社の説明には「丹波氏をはじめ大宮司と座主を兼ねていたが、大祝の物部氏が栄えて大宮司座主にもなり、鏡山・神代・宗崎の諸

「道をゆく」(21) 成瀬和之

「熊野街道」(八)

氏に分かれた。」とあります。素直に考えれば、大宮司座主となった物部氏と、筑紫の君磐井を破った物部鹿火(あらかい)との関連が読み取れます。また、大善寺玉垂宮の鬼夜祭は、前期九州王朝を「鬼」としながらも密かに敬った歴史を反映しているのではないかと思います。第二に、八女古墳群の変化です。そこには肥後勢力の進出が読み取れます。私は「隠された歴史(十九)」で敏達紀の日羅記事に出てくる「葦北国造」は継体の磐井(前期九州王朝)制圧の前線基地ではないかと考察しました。その考察は八女古墳群の変化と整合していると考えます。

以上、高良大社神籠石・大善寺玉垂宮・岩戸山古墳を初めとした古墳群によって、倭の五王・磐井と続いた前期九州王朝を考古学的に考察しました。次回はもう一度博多湾岸に戻って、後期九州王朝の存在を考古学的に考察します。



熊野街道のことを、とくに堺や泉州の人は「小栗街道」と呼びます。常陸の国の城主の息子である小栗判官と照手姫の夫婦愛にちなんだ言い方です。重い病と障害を負った小栗判官を、照手姫は土車に乗せてこの街道を通って、熊野の湯の峰温泉まで曳いていき、その「つば湯」で湯治したところ全快したという物語に由来します。前回の熊野比丘尼が、全国を回って熊野詣を勧める時の「とつておきのお話」だったのではないのでしょうか？

JR阪和線下松駅の東側に轟橋という橋があります。小栗判官を乗せた土車(土を運ぶ二輪車)を照手姫が曳いて、この橋を渡る時土車の車輪が鳴りました。これにちなんで「轟橋」と呼ぶようになったという伝説があります。現在は上轟橋と下轟橋があり、府道は上轟橋を通っています。JR東岸和田駅の東側からの熊野街道は、開発が進み、分かりにくくなっています。そこで、府道大阪和泉泉南線を南下することになります。岸和田市の「畑町」から貝塚市の「半田」と渡来人の秦氏とかかわりをもつと思われる地名が続きます。JR東貝塚駅の東側には河勝山道教寺(浄土真宗・本尊は阿弥陀如来)があり、寺伝によると、

聖徳太子の片腕だった秦河勝の子孫で秦右兵部が本願寺第三世覚如に帰依して道宣と号し、寺を開基したと言います。寺の前の道路には「秦」の字が刻まれています。

熊野詣は京都から大阪市、泉州を南下して和歌山に入り、熊野三山を目指す約三七〇キロメートルの道のりです。歩くとはんとうに長いです。和泉をあるいていると、次のポイントとなる麻生川王子・鞍持王子・近木王子・鶴原王子の跡がはつきり分ならず、とくに長く感じます。

JR和泉橋本駅からは阪和線を離れて、南海本線泉佐野駅の方へ南西に熊野街道は進みます。

貝塚市から泉佐野市に入り、さらに佐野川の手前辺りまで南進すると、元成寺というお寺があります。この庭に「顕如上人由緒の碑」が建っています。顕如上人は本願寺一一世宗主です。織田信長の全国統一事業における最大の敵は、石山本願寺を頂点にし、全国各地の浄土真宗寺院や寺内町を拠点にして信長の支配に反抗した一向一揆でした。顕如は教団維持のため当初は無抵抗を説き、戦国大名との政治的交渉によって本願寺を守って来ましたが、一五七〇年の信長による石山本願寺明け渡しに対して、遂に信長との戦いを決意し、一一年に及ぶ石山戦争が展開されました。しかし、一五八〇年、顕如はついに屈服して、石山(今の

大阪城のあるところ)を退去しました。そして、紀伊(和歌山県)に向かう途中、元成寺の裏手の「隠れ井戸」に身を寄せたという伝説があります。

元成寺から、さらに南西に歩き、上町一丁目の高い鉄塔を通り過ぎ、泉佐野市役所の方に向かう途中に「佐野王子址」があります。佐野王子は一九〇八年(明治三二年)春日神社に合祀されました。佐野王子跡は、戦後の一九四七年に大阪府指定史跡となり、「佐野王子址」の顕彰碑が建てられ、きれいに整備されています。藤原定家は「冬の日」 あられふりはへ 朝たてば 浪に浪こす さのの松原」と詠んでいます。小栗判官伝説の絵が描かれた泉佐野ボランティア協会の手になる熊野街道の案内板が目を引きました。

今年も一年間「道をゆく」をお読みくださりありがとうございました。新型コロナウイルスのパンデミックの中、ポストコロナの時代を展望するお正月を迎えます。

新年に当たり提案があります。

提案

NHKのEテレで一月「二〇〇分」で名著「資本論」が始まります。月曜日の毎週午後一〇時三十分五分です。NH

Kテキストはすでに発売されています。気候変動など地球環境問題、食の問題、格差の拡大、さらには、大阪の「都構想」のようなカジノを指す資本収奪型の構

想に変わる、住民みんなでつくるコミュニティの構想までカバーしています。講師は今注目の三三歳の若手論客、斎藤幸平さんです。かつて「資本論」読破、挫折した人も、初めて「資本論」を読む人も、明日への希望が湧いてきます。「二分で名著 資本論」を手掛かりに「資本論」をひもといてみませんか。斎藤幸平さんやグレッタ・トゥーンベリさんの後について学びましょう。地球温暖化で気温が四度上がると、東京の江戸川流域も大阪の淀川流域も水没してしまいうそうです！

そうならないことを願って、よいお年を。



編集後記

SK生

▼ 「芥川たより」の168号もできあがり、新しい年、二〇二一年を迎えることができました。お互い「あけましておめでとう」ございます」と新年を祝い合う言葉を交わしたいのだが、今年はどうもいかぬ。

「めでたさも中ぐらいなり おらが春」という一茶の句もあるが感覚的には「中ぐらい」とはとてもいいかない。寒さもこれから本番。医療崩壊が起こるのではないか、という不安がいつそう募ってくる。

▼ 毎日、報道されるウナギ登りに増えていく感染者数と死者の数。それと同時にこれも連日のように伝えられる失業者数と倒産者数。先の見えぬ不安にさいなまれる日々である。こうしたとき人の常として、我々は深い考えなくして「正解だ」と思えるものにあわてて飛びついた、こうあってほしいと思う現実のみを信じて行動したりする。しかし、すべての物事に正解があるわけではなく、すべて自分の希望通りに物事が進んでいくわけでもない。こんなことをいえば「子どもじやあるまいし、馬鹿にするな」と怒られそうだが、昨年から政府や我々国民の動きを見ていると、どうも筆者も含めてこの弊から抜けきっているとはいえない。

ない。こういう時だからこそ科学史家の村上陽一郎氏は「ネガティブ・ケイパビリティ negative capability」が必要だと説く。一言でいえば、容易に正解や解決策の出ない事態をありのままに受け止め、なかなかその答えが出ない状況にじつと耐える能力である。他者の考えを即座に否定せず、ひとまずは受け入れる態度・能力を「寛容」というなら「ネガティブ・ケイパビリティ」も「寛容」の一つといえるだろう。偏見、短慮、希望的観測等から発する「不寛容」は世に満ちて「寛容」であることは苦しいことだが、コロナに苦しむ今だからこそ「寛容」は必要なのだろう。

▼ この項を書いているうちに米国で連邦議会の議場がトランプ大統領の支持者たちによって占拠されるという事件がおきた。しかも死者が警備の警官を含め五人も出たという。ノーベル賞作家大江健三郎の師である渡辺一夫は、人がしばしば間違いを犯し無反省のままに容易に理性を持たぬ機械と化す存在であることを指摘し寛容の大切さを説いた。そうした彼の文章の一つに米国の最高裁判事O・W・ホームズ次の言葉が引用されている。

我々と同じ意見を持っている者のための思想の自由ではなしに、我々が憎む思想のためにも自由を与えることが大事である。

かつて存在したこの気高い精神が、まだ

健康な状態であるかどうか、米国が民主主義の国であるかどうかの試金石となるにちがいない。相手の主張を受け入れることのできない余裕のなさ。コロナ危機の出口が見つからぬ不安といらだち。

「ネガティブ・ケイパビリティ」が世界中で失われつつある。

▼ 随筆・発句集「おらが春」では冒頭に示した「めでたさも……」の直後に「這へ笑え 二つになるぞ 今朝からは」と数え二歳となったわが子の成長ぶりを一茶が目を細めて喜ぶ句がある。こうした人間らしい生き方を求めようとする心根とそれを可能とするのに必要な「ネガティブ・ケイパビリティ」の賢明さがある時期なのである、今は。

《以下メモ欄》

新年のごあいさつを申し上げます

人間の迂闊をコロナあぶりだし

そんな一年でしたが、昨年4月来
思いもかけず地域の川柳会の運営
の一端を担うこととなり、句誌の編
集に関わってきました。

川柳会の皆さんの句の一つひと
つに親しく接して川柳の宇宙の広
大さを学び、五七五の世界のいい読
者になることができました。それを
自らの句に生かされたかどうかは別
の問題ですが、感謝をこめて二〇二
〇年の自選句を記します。

店仕舞うように私を仕舞えない
生きてゆく支点力点作用点
雨を知る草にも生きているリズム
凜とした桃の固さが好きだった
温暖化一度で空の底が抜け
考える葦も戦の虫になる
花は咲く戦に負けてからも咲く
村度の後ろの正面だーれだ
この男未知数なのか変数か
ふるさとの山はとことん
泣けと言う

平凡に生まれて生きて蝸牛
角出さず目玉も出さず見得を切る
ウイルスが暮らしの音を消して秋
コロナにも自粛はしない虫の声
天高く蠅螂斧を降ろさない
チンチンチン鐘叩き鳴く秋夜長
山眠る夢多かれと春を待ち



萩の花



カネタタキ



カマキリ



彼岸花

俳句

土田 裕

マスクして目と目で交はす
御慶かな
密を避け十日過ぎての初詣
今年またビルの寸土に福寿草
芹なずな五臓六腑を癒しけり
中入りの触れの棋響き初相撲

影山 武司

初声や黒々明くる天満宮
目隠しを取りて幼の福笑ひ
恋の札取られまじとて歌がるた
左義長の空へ青竹立ち上がり
柴又に鳩の巡回旅始
漣の立ちくる木の葉時雨かな
旗竿のかたかた鳴るや寒鴉
冬ぬくし英語訛るといふことも
生ひ立ちを問はず語りの炬燵かな
厄除の札所巡りや石路の花



「飛び立つ」
©Ishikawa Gorou